

データサイエンス応用教育プログラム(経営学部) 自己点検・評価結果(2023年度)

1. 点検・評価の実施

教務委員会およびAOL委員会が実施主体となり前年度開講した「データサイエンス応用教育プログラム(経営学部)」に関連する授業科目の点検・評価を行った。内容、方法などは「名古屋商科大学における教育の内部質保証に関する方針」を準用し、学生に対する授業調査(アンケート)にて受講生に対するシラバスの整合性や有効性について調査した。

授業調査アンケート質問項目

(1～8は1～5の5段階で回答、9および10はコメント記入)

No	質問項目
1	シラバスに示された学修目標が達成できるよう実施された。
2	事前課題は授業の理解を深めるうえで有用であった。
3	使用したケースあるいは教材等は適切であった。
4	板書やスライドなどの使用は有用であった。
5	先生は積極的にクラス討議を促した。
6	先生の教え方には熱意が感じられた。
7	この授業で社会に対する理解が深まった。
8	この授業は知的意欲をかき立て示唆に富むものであった。
9	この授業の優れた点について記入してください。
10	この授業の改善点について記入してください。

2. 点検・評価の対象

授業科目の点検・評価では、前年度開講した「データサイエンス教育プログラム」に関連する授業科目を全て対象とした。

3. 改善について

授業調査の回答結果、学生からのコメントは各教員に伝えており、教員は、教授法の改善・工夫に取り組んでいる。また、教員は次年度のシラバスに前年度の学生からの授業調査に対するコメントを記載し公表している。

2023年度データサイエンス応用教育プログラム(経営学部)」に関連する科目の授業調査結果

経営学部の学生を対象に「情報リテラシー1(2単位)」、「情報リテラシー2(2単位)」、「統計学入門(2単位)」および「AI実践(4単位)」、計10単位全てを修得することを条件とする

No	授業科目名	授業調査結果	受講者数
1	情報リテラシー1	平均ポイント:3.91 回答率:73%	754
2	情報リテラシー2	平均ポイント:3.92 回答率:69%	702
3	統計学入門	平均ポイント:3.88 回答率:76%	316
4	AI実践(4単位)	平均ポイント:4.26 回答率:70%	46

4. 自己点検・評価体制における意見等

学内からの視点

a. プログラムの履修・修得状況

学生支援部門教務担当および同コンピューター担当において、プログラムの履修・修得状況の分析を実施し、LMS (Learning Management System)や学生カルテシステムに蓄積されたデータの活用により、受講者毎の履修進捗状況や課題への回答状況を把握することができる。これらの蓄積されたデータの分析については、AOL (Assurance of Learning) 委員会の委員と協働で実施している。また、令和3年度よりデジタルを活用した大学・高専教育高度化プランの採択を受け学修成果の可視化による個別指導の充実と学修者本意の教育を実現するためのデジタルツールを整備する計画であり、それらの機能の活用も進める。

b. 学修成果

本学では、国際認証機関の基準をもとにAOLに取り組み、学修成果の測定指標として活用されている。学習成果測定のベースになるのは、測定項目LGと、具体的に学生に修得して欲しい能力を明示した学修目的:LO(Learning Objective)である。LGならびにLOは、平成18年(2006年)以降、見直しが行われてきており、現在においては、学部においては合計8つのLGが設定され、それに付随するLOも設定されている。学修成果の測定には、LOをベースに作成されたルーブリックが使用される。

c. 学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度

名古屋商科大学授業調査規程規程に基づき、全ての授業について授業調査アンケートを実施している。授業調査アンケートの結果に基づき、教務委員会において学生の理解度分析を実施している。その他、教務委員会と学生支援部門コンピューター担当とが連携して、必要に応じてLMS上で学生の理解度を把握するためのアンケートを実施する。それらの結果等を総合的に検討して理解度の把握に努める。

d. 学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度

本学では教育内容・方法および学修指導等の改善のため、全ての授業において授業調査を実施している。教員には前年度の学生の授業評価に対するコメントをシラバスに記載するよう義務づけており、後輩学生はそのコメントを見て履修登録することが可能である。

- e. 全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況
情報リテラシー1・2や統計学入門などデータサイエンスの基礎となる数学系の科目履修者は履修指導により増加している。しかし、以前として、やや難易度の高い「AI実践(4単位)」については履修者数が少ないのが課題である。難易度が高く学生が履修を避ける傾向もある科目もあるが、クラス開講数が少ないことから履修者数が少ない科目もあるため今後、クラス数の増加などについても検討が必要である。また、学生の理解度(履修率)向上のためチューター(SA)を配置することも検討している。

学外からの視点

- a. 教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価
本学では卒業後三年を迎える卒業生に対して、アンケート調査を実施することを予定している他、卒業生には転職などをした際に就業先企業の情報を本学同窓生WEBサイトから報告するよう卒業時に依頼をしている。本学では卒業後のアンケートを実施しておりまた就職先企業の情報などをもとに企業アンケートを実施することを予定しており、これらの情報を活用して当該データサイエンス教育プログラム修了生の採用状況や企業評価を把握する仕組みを構築している。
- b. 産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見
本学が実施予定の産業界ニーズ調査アンケートにて、各企業が大学に求める人材育成に関する項目の調査をする。これらの調査結果を踏まえ、企業が大学で実施するデータサイエンスプログラムに対してどのような期待や習得すべき技能や知識を求めているかなどを把握しプログラムの改善に活用していく。

数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること

本学では全学的にケースメソッドによる実践的なビジネス教育を推進しており、データサイエンスの知識や技能を活用した実用的な教育を実施している。ケース教材は近年実際に起こった事例をもとにして作成されていることが多く、実際の現実の状況下に学習者が身を置き、事例を追体験することを繰り返すことを通して、今後どのように情報化が進展しようとも、受講生自身が情報を取捨選択し、様々な事柄を勘案しながら、的確に意思決定できることを目指す。

5. 内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること

名古屋商科大学授業調査規程規程に基づき、全ての授業について授業調査アンケートを実施している。授業調査アンケートの結果に基づき、AOL委員会にて講義の内容・実施方法の見直しを検討している。また、プログラム全体の改善点については、教務委員会と学生支援部門コンピューター担当が連携して、データサイエンス教育プログラムの受講学生に対するアンケート等を実施してプログラムの維持向上に努める。